

# 目次

はじめに

## I 調査の概要

1 調査のねらいとデザイン	1
2 NFRJ-08Panel の特徴とその可能性	4
3 他パネル調査と比較した NFRJ-08Panel の特徴	12
4 調査票の特徴	15
5 回収状況	24
6 NFRJ-08Panel における脱落	27

## II 基礎統計量報告

1 記述分析の方針	33
2 基本属性および1回きりの設問への回答の分布	37
2.1 性別、出生年、年齢、学歴、都市規模、DID	37
2.2 1回きりの設問	41
3 イベント	50
4 期間中に変化する変数	54
4.1 回答者の職業	54
4.2 結婚や配偶者	61
4.3 全体的な生活	79
4.4 子ども	86
4.5 両親	108
4.6 きょうだい	115
4.7 義父母	124
4.8 世帯、態度、その他	130

## III 研究報告（簡易版）

1 女性就業を規定する社会経済的要因および家族要因	149
2 ワーク・ファミリー・コンフリクトの変化	155
3 性別役割分業意識の経年変化：性別・世代・学歴に着目して	160
4 定年による家事分担の変化	166
5 夫婦の家事分担における代替関係	172
6 子どもの誕生による生活満足度・家事満足度・育児満足度の変化	177
7 親の子どもに対する関わり方の経時的変化と規定要因	183
8 夫婦間の相互作用の時間に伴う変化	189

9	NFRJ W1、W2 の子育て世代の特徴	193
10	定年退職が精神的健康に与える影響	199
11	世代間援助の時点間変化とその要因：NFRJ-08Panel wave1-2 の分析	204
12	女性の就業とメンタルヘルス	210

#### IV 資料

1	クリーニングについて	217
2	研究成果一覧	230
3	研究会活動記録	231
4	調査票（wave1～wave5）	233

## はじめに

西野理子（東洋大学）

本書は、全国家族調査パネルスタディ（National Family Research of Japan, 2008-2012 Panel Study; NFRJ-08Panel）の完了報告書である。

全国家族調査パネルスタディ（NFRJ-08Panel）は、日本家族社会学会全国家族調査委員会（NFRJ委員会）が1990年代から行ってきた家族調査の延長上にある。日本家族社会学会の会員有志の活動から始まったNFRJは、組織をつくりファンドを獲得して、家族に関する全国規模のデータを収集して公開してきた。パネル調査の実施は、当初から計画の俎上にはあったが、実現にいたる前のハードルは高く、具体的に取り上げられるチャンスがないままに第1回、第2回の横断トレンド調査を終えていた。そして、第3回の調査NFRJ-08の計画が具体化した最終段階で、その一部をパネル調査として開始することが可能になった。

パネル調査の実現に立ちほだかるハードルが解決しているわけではない。第一に、現在の日本社会では長期間にわたる資金が獲得できない。本パネルの資金源となった日本学術振興会科学研究費助成金も、長くて5年間という期限がある。研究の趣旨からいえばより長期間の実施が望ましいことはいうまでもないが、本パネル調査も5年間という期限内での実現となった。第二に、パネル調査ではデータ収集に時間がかかるので、成果を得られるのが開始からずいぶん遅くなってしまふ。成果が得られないままに、ある程度長期にわたって労力を費やさねばならないが、NFRJはあくまで学会員有志によるボランティアな組織であって、専属のスタッフがいるわけではない。成果を出さなければならない研究者が、相応の労力を投じながら成果を待たねばならないという矛盾を抱える。

全国家族調査パネルスタディ（NFRJ-08Panel）のプロジェクトは、家族に関するパネル調査をぜひ実現させようという有志を得て実現することができた。実行委員会を組織して運営の中心を担ったのは、次頁の実行委員会メンバー8名である。学会員のなかからさらに有志を募り、NFRJ-08パネル研究会をたちあげ、そのメンバーで研究会活動、ならびにデータのクリーニングなどの作業協力とデータの共同利用を行っている。研究会メンバーは次々頁の通りである。

研究会メンバーは、最終回調査の訪問にも一部、参加した。それまでに蓄積したデータからわからない個所が多かったケースに限って、研究者である研究会メンバーが実査に加わり、可能な限り精確なデータ収集にあたったものである。このかたちも、NFRJ発足当初に発足時の中心メンバーが発案していたものである。全国に散住する学会員が協力して調査に参加するという夢は、秘密保護の見地から学会員に開かれた態勢で実現するわけにはいかなかったが、むしろ秘密保護優先ゆえに実査の現場に出る機会がない現在だからこそ、とくに若手にとって良い機会になった面もあるように思われる。

実行委員会委員ならびに研究会メンバーの尽力を得て、2009年度の初回開始から

その後の5年間にわたって、この家族に関するパネルデータは収集、整備されてきた。実行委員会のメンバーは、研究会活動の運営をはじめとして多岐にわたって責任と負担を担ってきたが、なかでもクリーニングの中心を担った保田時男委員には、格別のご尽力を賜った。とくに記して感謝したい。また、松田茂樹会員は、本プロジェクトの開始当初、メンバーとして協力してくださった。この場を借りてお礼申し上げたい。

時間のかかるパネルデータの収集をようやく実現し、本書を出す時点までたどり着いた。これからさらなる成果を公表していくために、本書がその第一歩のてがかりとなることを期待したい。

本研究は、日本学術振興会科学研究費助成金の提供を受けて行われました。

研究課題：パネルデータによる現代日本家族の動態研究

研究番号：21243034

研究期間：平成21年度～平成25年度



- \* 初回の調査（wave1、NFRJ08）実施にあたっては、NFRJ08の研究代表者（稲葉昭英・教授）の所属先である首都大学東京において倫理審査を受けました。
- \* 最終回の調査（wave5）実施にあたっては、研究代表者（西野理子・教授）の所属先である東洋大学の社会学研究科において倫理審査を受けました。

#### 実行委員会メンバー

- 西野 理子（東洋大学 社会学部）【委員長】
- 永井 暁子（日本女子大学 人間社会学部）【事務局長】
- 田中 慶子（家計経済研究所）
- 田中 重人（東北大学 文学研究科）
- 筒井 淳也（立命館大学 産業社会学部）
- 水落 正明（南山大学 総合政策学部）
- 三輪 哲（東北大学 教育学研究科）
- 保田 時男（関西大学 社会学部）

## 研究会メンバー

- 池橋みどり (和光大学 現代人間学部)  
井田 瑞江 (関東学院大学 文学部)  
乾 順子 (京都大学 学際融合教育研究推進センター)  
内田 哲郎 (くらしのつくり方研究所)  
大瀧 友織 (広島国際大学 心理科学部)  
蟹江 教子 (宇都宮共和大学 子ども生活学部)  
神原 文子 (神戸学院大学 人文学部)  
金 貞任 (東京福祉大学 社会福祉学部)  
坂本 有芳 (日本学術振興会)  
佐野 俊幸 (首都大学東京大学院 人文科学研究科)  
菅澤 貴之 (奈良先端科学技術大学院大学 キャリア支援室)  
菅野 剛 (日本大学 文理学部)  
鈴木富美子 (明治大学 情報コミュニケーション学部)  
瀬地山 角 (東京大学 総合文化研究科)  
多賀 太 (関西大学 文学部)  
竹内 麻貴 (立命館大学大学院 社会学研究科)  
田中 慶子 (家計経済研究所)\*  
田中 重人 (東北大学 文学研究科)\*  
筒井 淳也 (立命館大学 産業社会学部)\*  
得津 慎子 (関西福祉科学大学 社会福祉学部)  
苔米地なつ帆 (東北大学大学院 教育学研究科)  
永井 暁子 (日本女子大学 人間社会学部)\*  
中島 満大 (京都大学 文学研究科)  
中西 泰子 (相模女子大学 人間社会学部)  
西野 勇人 (立命館大学大学院 社会学研究科)  
西野 理子 (東洋大学 社会学部)\*  
林 雄亮 (尚綱学院大学 総合人間科学部)  
福田 亘孝 (青山学院大学 社会情報学部)  
松井 真一 (岐阜大学 男女共同参画推進室)  
松永 愛子 (目白大学 人間学部)  
水落 正明 (南山大学 総合政策学部)\*  
三輪 哲 (東北大学 教育学研究科)\*  
保田 時男 (関西大学 社会学部)\*  
山西 裕美 (熊本学園大学 社会福祉学部)  
吉田 崇 (静岡大学 人文社会科学部)  
吉原 千賀 (高千穂大学 人間科学部)  
余田 翔平 (日本学術振興会)  
李 秀眞 (弘前大学 教育学部)